

## Stylex の使用経験

渡辺 裕介<sup>1)</sup>・久保山 知紀<sup>1)</sup>・中畑 晶博<sup>1)</sup>・河野 憲志朗<sup>1)</sup>・江本 玄<sup>2)</sup>・湯朝 友基<sup>2)</sup>

1) 江本ニアンドスポーツクリニック リハビリテーション部

2) 江本ニアンドスポーツクリニック 整形外科

### 【はじめに】

韓国の医療機器である Stylex は、一定期間使用すると内反変形の改善が得られるという報告がある。そこで今回、Stylex を使用することにより立位姿勢での両膝関節内顆間距離（以下 ICD）、関節裂隙がどのように変化するのかを、使用前後で比較した。

Stylex は「膝関節の O 脚変形は股関節の外旋筋力低下、外旋可動域低下が深く関係している」というコンセプトを基に、韓国の整形外科医が考案し、asion 社により 2006 年に開発された装置である。使用効果は股関節の外旋筋促進、外旋可動域拡大である。

### 【対象】

ICD を 10mm 以上有する健常成人 10 例（男性 5 例、女性 5 例、平均年齢 29.0 歳、以下 control 群）、当院において鏡視下内側半月板部分切除術を施行した症例 10 例（男性 5 例、女性 5 例、平均年齢 61.3 歳、以下 AS 群）を対象とした。

### 【方法】

ICD の測定と X 線上での膝関節内側裂隙をローゼンバーク肢位にて測定した。1 日 1 回の使用とし、7 回以上施行した。最終実施日に ICD と膝関節内側裂隙を測定した。施行前後で ICD、関節裂隙をそれぞれ対応のある t 検定を用いて比較。ICD と関節裂隙の変化の関係性を、ピアソンの相関係数を用いて比較した。危険率 5%未満を有意とした。

### 【結果】

Stylex 使用中に AS 群において疼痛の訴えを認めたため 3 人の離脱者がみられた。ICD の変化に対して Stylex 使用前後では両群共に有意差は認めなかった。X 線上における関節裂隙において、Stylex 使用後は両群共に有意差のある変化は認めなかった。しかし、control 群 3 例、AS 群 2 例において、ICD、関節裂隙ともに改善を認めた。両群ともに ICD と関節裂隙の変化に対して相関を認めた。（ $P < 0.05$ ）

### 【考察】

Stylex の使用は両群ともに有意差のある変化は得られなかった。要因として、症例数が少数であり、施行期間が短かったことが考える。そのため、被検者数の増加、施行期間の延長を行っての研究が必要だと考える。また、数名ではあるが ICD、関節裂隙の変化を認めたことより症例においては処方が期待できる可能性がある。そのため、今後どのような症例に対し、効果が得られるかという評価も必要であると考られる。

AS 群に離脱者が出現した理由として、股関節の柔軟性が乏しく、膝関節に外旋ストレスが加わり、痛みが出現したものとする。